

ベートーヴェンへの旅 vol.6

ナポレオンとベートーヴェン—『英雄』交響曲をめぐって

神戸大学大学院教授 / 音楽評論家

藤野 一夫

脱神話化と真実

ベートーヴェンの第3交響曲「英雄」をめぐるエピソードは、あの「不滅の恋人への手紙」と同様、いぜんとして謎に包まれています。とはいえ、後世に語り継がれてきた「神話」の真偽については実証的な研究も進んでいます。ベートーヴェンの「脱神話化」というプロセスは、学術的研究にとっては不可避ですが、それが「楽聖」のイメージを変えたり、損なったりすることもある。そもそも「事実」と「真実」とは同じものなのでしょうか。創作されたものの中から見出され、「これこそが本物だ」と実感される「真実」は、歴史的な客観性という意味での「事実」とは相容れないかもしれません。しかし脱神話化されたベートーヴェンの実人生に、私たちは落胆する必要もないのです。フィクションである芸術が啓示する真実は、歴史的事実を超えた「真理」を開くものだからです。

故郷ボンの宮廷の正オルガニストと国民劇場のヴィオラ奏者を兼務していたベートーヴェンは、フランス革命の年である1789年、創設まもないボン大学の聴講生となり、フランス革命支持の論客シュナイダー教授に傾倒したとされます。



ボンのベートーヴェン像

著者私物(撮影著者)

1792年、フランス軍のドイツ進攻の合間をぬってウィーンへ向かったベートーヴェンは、心情的には共和主義者でありながらも、対仏戦争のもとで愛国主義を発揚する『オーストリア軍歌』や『ウィーン市民への告別の歌』をも作曲しています。1797年、カンポ・フォルミオの講和で、ナポレオンの副官を務めたベルナドット将軍がウィーンのフランス大使に着任し、ベートーヴェンと親交を結びます。ここから『英雄』交響曲の最初の構想が生まれたとされます。

1800年から神聖ローマ帝国が滅亡する1806年にかけて、ベートーヴェンのフランス観には激変が見られます。1801年、ナポレオンはローマ教皇と取引し、教会財産と教皇権の復活を認めました。ベートーヴェンは、教会制度を旧体制の温床と見なしていたので、このとき「終身第一執政」になっていたナポレオンに不信感を抱き始めていたようです。それでも1803年から翌年にかけて、ナポレオンに献呈するつもりで「ボナパルト」交響曲に取り組んでいました。

ところが1804年5月20日にナポレオンの皇帝宣誓が行われ、これを知ったベートーヴェンは激怒。ボナパルトへの献呈辞を破って標題ページを「シンフォニア・エロイカ」と書きかえました。なお1806年10月の初版譜には、その標題の下に「ある偉大な人物の思い出を祝して」と記されました。しかしドイツ語圏では、その偉大な人物がナポレオンを指すものであることは、19世紀の終わりまで隠匿されていたのです。



ナポレオン戴冠 ジェラルド作

著者私物(撮影著者)

裏切られた連帯

ナポレオンの皇帝宣言をベートーヴェンに伝えたのは、弟子のリースとされています。リースが『ベートーヴェンに関する覚書』を書いたのは1837年のこと。献呈辞の表紙を破り捨て、標題を書きかえたエピソードは伝説化され、ベートーヴェン神話に寄与してきました。政治上の英雄を生み出せなかったドイツでは、芸



ボナパルトのために書かれたことの抹消

著者私物(撮影著者)

術家が英雄として祭り上げられました。ベートーヴェンはフランスに対抗するドイツ・ナショナリズムの英雄となったのです。

もちろんリースが伝えている「激怒」は事実でしょう。しかし一時的に「ボナパルトと題された」という文字が削り取られたとしても、1804年8月にベートーヴェンが出版社に送った手紙には「この交響曲は、ほんとうはボナパルトというタイトルです」と書かれていました。つまりベートーヴェンにとって、一時的にせよ「ボナパルトと題された」交響曲である、という事実を抹消しなければならない事情が生じたのではないのでしょうか。

第3交響曲は1805年4月7日、アン・デア・ウィーン劇場で公式に初演されましたが、前年の5月末から6月初旬に、ロブコヴィツ邸で私的初演が行われていた事実注目しましょう。ナポレオンの皇帝宣誓式と同時期に当たるからです。ロブコヴィツ侯爵はベートーヴェンの有力なパトロンで、この交響曲も彼に献呈されています。侯爵は対ナポレオン戦の戦費調達にも積極的に協力するほどのオーストリア愛国主義者でした。そこでベートーヴェンは、献呈者のための私的演奏会のスコアに「ボナパルトと題された」と記されている不都合を察し、慌てて「敵の名」を抹消したものと推測されるのです。

ところが、1805年8月に第3次対仏同盟によって全面戦争に突入するまで、ベートーヴェンには心の奥に秘めた企てがありました。パリへ旅行して、ナポレオンの前で「エロイカ」を演奏する計画です。もとよりベートーヴェンは、自らを貴族の一員と考えていました。ただし、その貴族とは生まれの高貴さというよりも、むしろ自分が為してきた仕事の内容によって決まるべきステータスと考えていました。

この精神の貴族主義は、実は経済的自由主義のエートスに貫かれた能力=業績社会の反映でもありました。ベートーヴェンが依存していたパトロン制度は、一見すると自律した芸術活動とは矛盾するようですが、その実力主義からすれば当然の権利と考えられていました。作品の内容に口出しされることなく、ベートーヴェンは年俸と創作の自由をともに手にできた稀有な芸術家でした。

ナポレオンに対するベートーヴェンの強い共感、コルシカ出身の没落貴族が自力で掴み取った、その政治的偉業に向けられていました。ベートーヴェンがナポレオンに抱いた自らの理想は、精神の貴族が人類の救済者となる、という「真理」において一致していたはずなのです。ところが、その熱い連帯表明は次々と裏切られ、決定的に引きちぎられます。1809年5月、再度フランス軍によるウィーンの軍事占領が行われたとき、その砲弾の最中でベートーヴェンは書簡にこう記しています。「私の周りには、何という無秩序なのでしょう。あるものと言えば、あらゆる形態の人間の惨めさだけ。そして太鼓と大砲の音ばかり」。

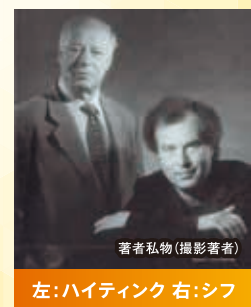
カール・シューリヒトがフランス国立放送管弦楽団を指揮した『英雄』は、理想化されたナポレオン精神の結晶とも言うべき閃きに満ちた超名演。1963年のシャンゼリゼ劇場での奇跡のステレオ実況録音です。フランスのオケ特有の明るい響きと色彩感を湛えた木管群がシューリヒト独自のオーラを発する。淀みなく求心的に躍動する命そのものです。



著者私物(撮影著者)

シューリヒト

他方、ピアノ協奏曲第4番では、アンドラーシュ・シフのソロ、ハイティンク指揮のシュターツカペレ・ドレスデンが秀逸。ゆとりと安らぎに満ちた雄大な叙情



著者私物(撮影著者)

左:ハイティンク 右:シフ

の中で、孤高の魂が深く繊細な髪を丁寧に刻んでゆく。シフの思索する音楽は、とりわけ第2楽章の雰囲気にとりわけ第2楽章の雰囲気にとりわけ第2楽章の雰囲気にぴったり。立体的に和合するオーケストラの響きともども、その存在感のある美音にいつまでも浸りたい至福の世界です。



藤野 一夫 プロフィール

1958年、東京生まれ。神戸大学大学院国際化学研究科教授。ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー。文化経済学会理事、文化政策学会副会長、(公財)びわ湖芸術文化財団理事、(公財)神戸市民文化振興財団理事、日本ワーグナー協会理事他。専門はドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学。近著に『ワーグナー 友人たちへの伝言』(法政大学出版局)、『公共文化施設の公共性』(水曜社)、『地域主権の国 ドイツの文化政策』(美学出版)、『基礎自治体の文化政策』(水曜社)。日経新聞等の音楽批評を担当。